

一般助成 子どもの健やかな成長を願う事業(やすらぎ・いたわり)

## 『2019パラアートTOKYO』 第6回国際交流展」事業

### 障がい者(児)芸術の重要性を「パラアート」という言葉とともに世界に向けて発信する活動に取り組む

芸術は国境も人種も障がいの有無も超えて、豊かな感情や多彩なテーマを伝えることができる人類共通の表現方法である。障がい者の芸術活動が世界的に注目を集めているが、日本においてその支援はまだまだ不十分である。「パラアート」という言葉を普及させることで、障がい者芸術への認知と理解を深める活動に取り組む団体がある。



障がい者芸術を発信・拡大する2019 PARAART TOKYOを告知するチラシ



2009年から開催し、今回で6回目の開催となる

### 世界に向けてパラアートを発信するため障がい者(児)の芸術文化活動を支援

公益財団法人「日本チャリティ協会」は1966年の設立以来、障がい者(児)や高齢者の福祉文化活動に積極的に関わってきた。芸術、文化、スポーツ、レクリエーションに参加する機会と場を提供し、豊かで生きがいのある暮らしの実現に向け、主に以下のような事業を実施している。

1. 障がい者(児)の芸術文化の振興、才能開発、就労・社会参加の促進
2. 障がい者(児)の健康、生きがい、豊かな生活づくりに寄与するための事業
3. 高齢者の健康、生きがい、社会参加の促進
4. 障がい者芸術文化の国際交流・友好親善のための事業

5. 障がい者(児)および高齢者の健康、生きがいなどに関する調査研究
  6. 障がい者(児)支援、老人福祉等のための福祉施設等の評価
- なかでも障がい者の芸術活動に力を入れ、「東京都障害者総合美術展」、パラアートスクール(障がい者のカルチャースクール)などに継続的に取り組んできた。「パラアート」とは聞き慣れない言葉だが、スポーツの世界にパラリンピックがあるように、芸術文化の世界においても障がい者(児)による芸術が認知されることを願い、それにふさわしい呼称ということで、同協会が使い始めたものである。
- 同協会では世界に向けて障がい者芸術を発信・拡大していくため、日本・中国・韓国を軸に、2009年からパラ

アートを冠した「パラアート国際交流展」を開催してきた(これまで5回開催)が、昨年、AJOSCの助成を受け、6回目となる国際交流展を開催した。

### これからの社会を形成する子どもたちの世界に着目して18歳未満の作品を募集

パラアートの第6回国際交流展は、東京都のとしまセンタースクエアを会場に、昨年11月20～24日に開催された。世界21カ国から集まった絵画と書の196点(応募数702点)の作品が展示されたが、今回の特徴として、これからの社会を形成していく子どもたちを支援するという目的で、18歳未満の障がい児の作品を募集し、審査・展示するとともに、パラアートジュニア賞5作品を選出した(日本3点、海外2点)。

また、児童や障がい者を対象に、「書いてみよう!描いてみよう!」と題した記念ワークショップを開催した。「書」部

門には金澤康子さんと金澤翔子さん、「絵画」部門には八木道さん、「マンガ」部門にはウノ・カマキリさんが講師として登場した。さらに最終日にはクロージングパフォーマンスとして障がい者による音楽ダンスのパフォーマンスが行われた。同協会によると、来場者数はのべ1,400名を超えたという。

同協会の関係者は今回の交流展を振り返り、「当協会の展覧会では身体障がい者、知的障がい者、精神障がい者の方々の作品が展示され、それぞれの障がい特性が芸術的に表現されていて興味深かった。また、児童の作品からはのびのびとした素直な感性が感じられた」と話す。来場者へのアンケートでも、「豊かな感性と素晴らしい作品に感動した」、「いろいろな国の障がい者の作品が一堂に集まり、パラエティに富んでいて楽しかった」という声が寄せられたという。



世界21カ国から集まった絵画と書の196点(応募数702点)の作品が展示



開催期間中に行われた絵画コースワークショップ

助成団体:公益財団法人 日本チャリティ協会

<http://www.charitykyokai.or.jp>



### 継続的な支援が障がい者(児)の芸術活動を支えます

今回のパラアート展では東京2020オリンピック・パラリンピックのレガシーを受け止める世代の子どもたちのアート環境を整え、障がい児の生きがいや社会参加への橋渡しとなる「障がい者アート」のすそ野を広げる機会になりました。子どもの健全育成に関する支援は、継続することで成果が表れてくると思います。今後も財政力の弱い団体への支援をお願いします。

公益財団法人 日本チャリティ協会  
会長 高木 金次さん